



北方民族博物館だより

No.112



H30.2 かんじき アサバスカン・インディアン／ノーザン・トゥショニー
カナダ／ユーコン準州／ベリー・クロッシング(収集地)
98.0 x 25.0 x 8.5cm Kevin McGinity氏製作 (2014年製作)

伝統的な手法で作られた手作りのかんじきである。シラカバ材を蒸して曲げ、動物の皮製のひもを張って作られる。製作者はノーザン・トゥショニーの自治政府の一つである、セルカーク・ファースト・ネーションの前チーフである。現在でも自治政府の住人は狩猟活動を積極的に行っており、冬の狩猟にはかんじきが必須である。現在では市販のかんじきが多く流通しているが、住民の中には本資料のような伝統的なかんじきを用いている者もいる。

目次 Contents

- 1 表紙 かんじき
- 2 企画展「融ける大地－温暖化するシベリア・中央ヤクーチア」
- 3 講座 北海道博物館紀行「三浦綾子記念文学館」
／講座「世界のサケマス事情」
- 4 ロビー展「ロシアのバッジコレクション」
／講座「知床の先史時代」
- 5 講座「北方民族の文様入門」
／講座「AIで色づけされた思い出の網走オホーツク」
- 6 INFORMATION

企画展

融ける大地

温暖化するシベリア・中央ヤクーチア

2019.2.2-4.7

会場：北方民族博物館・特別展示室

近年、国際的に地球温暖化の問題が取り上げられています。北方地域は、特にその影響を強く受ける地域の一つとされ、生態系や人びとの生活への影響が心配されています。本展示では、文部科学省の補助事業として実施されている北極域研究推進プロジェクトArCS(アークス)(Arctic Challenge for Sustainability)の研究結果から、ロシア連邦サハ共和国(ヤクーチア)中央部の自然や人びとの生活、地球温暖化の影響を紹介しました。

第一部「ヤクーチアの自然」では、ヤクーチアの地形、気候、植生の特徴などを地図や写真で紹介しました。気候については、人が暮らす土地としてヤクーチアが世界でもっとも寒く、北半球の寒極(最も低い気温を記録した地点)とされるオイミヤコンやベルホヤンスクもサハ共和国内にあること、降水量が年間300mm未満と少ないことなどを説明しました。また、ヤクーチアを特徴づける環境要因として、永久凍土や植生との関係について紹介しました。永久凍土とは、少なくとも2年以上、0℃以下の温度を保つ大地の状態を指す語です。サハ共和国のほぼ全域が300～400mに達する永久凍土層に覆われています。

気候の温暖化などで地温が上昇すると、より深い部分まで凍土が融け、凍土中の氷の塊の融解によって地面が陥没します。このようにして進行する地表層の変化「サーモカルスト」によって生じた凹地は、凍結と融解を繰り返しながら拡大し、周囲から流れ込む水などによって湖になります。この湖は、乾燥した気候によって徐々に干上がり、最終的には深い部分だけに湖を残す皿状の草地「アラース」になります。アラースは、ウマやウシの放牧地や牧草地として、また人や家畜の飲み水を確保する場として、サハの人びとにとって重要な生活の場になってきたのです。

第二部「ヤクーチアの人びと」では、ヤクーチアの主要民族「サハ(ヤクート)」に焦点を当て、民族資料や写真でその伝統的な文化を紹介しました。民族集団としての「サハ」は、かつてバイカル湖左岸地域に住んでいた人びとが、10～13世紀にレナ川中流域に移住する過程で、周辺の他民族を吸収しながら形成されたと考えられています。サハの伝統的な生業は、ウマとウシの牧畜です。ともに乳や肉は食料、皮は衣類などの材料として、また移動輸送手段としても利用されてきました。展示では、騎乗用の鞍やウマの装飾布、サハの伝統的な上衣、手袋、ブーツなどの衣類、白樺樹皮製の容器や儀礼道具など、実物資料のほか、写真を使って紹介しました。

第三部「融ける大地：中央ヤクーチアの温暖化」では、温暖化と中央ヤクーチアの環境変化について、二つの事例を紹介しました。一つめは洪水に関してです。レナ川では、毎年春に融けて流れ出した氷で川がせき止められ、洪水が起きてきました。近年、温暖化の影響により、これまで浸水することがなかった地域にまで水が押し寄せたり、夏に起きる洪水によって草が泥だらけになり、牧草として使えなくなったりという被害が発生しています。特に洪水被害がひどい地域では、村ごと高台に移転したケースもあるのです。

二つめは、土地の陥没に関してです。中央ヤクーチアでは、1990年代以降、永久凍土層上部の融解とそれに伴う土地の陥没が急速に進行し、建物が傾いたり、畑や牧草地に大きな起伏ができてトラクターが使えなくなったりするなどの問題が起きています。

ArCS調査班では、中央ヤクーチア・チュラブチャ郡でアンケート調査を実施しました。その結果、多くが共通して気温の上昇を感じている一方、降水量は「増えている」とするグループと「減っている」とするグループに分かれるという結果が出ました。また、環境変化が世帯の生活に及ぼす影響として、ウマ・ウシ牧畜と直接結びつく牧草地・放牧地の劣化が心配されていました。

こうした環境変化に対し、地域住民はどのように対応しているのでしょうか。チュラブチャ郡では、飼育されるウマの頭数が増える一方、ウシの頭数が減っています。その要因の一つとして、環境変化に対する住民側の対応が挙げられます。冬期間、ウマは雪の下の草を自力で摂取するのに対し、ウシには飼料として乾草を与えなければなりません。つまり、環境変化によって確保できる乾草の量が減ると、ウシの飼育が難しくなるのです。このような状況に対応し、中央ヤクーチアではウシからウマへの家畜の転換が起こっているのではないかと推測しています。

(学芸グループ 中田 篤)



会場の様子

講座

北海道博物館紀行
「三浦綾子記念文学館」

2018.12.1 10:00-11:30

講師：田中綾氏（三浦綾子記念文学館館長）



講師の田中氏

北海道博物館紀行は、北海道内の魅力ある博物館を紹介するシリーズです。今回は、旭川市にある三浦綾子記念文学館の館長・田中綾氏をお招きしました。田中氏は北海学園大学教授で近代文学、特に短歌の研究家として著名です。三浦綾子さんは、『氷点』、『塩狩峠』などで知られる作家です。また小説が有名ですが、短歌も数多く詠まれています。同館は、旭川市の外国樹種見本林に面しており、旭川駅から歩いていくことができます。館長の田中氏自ら、この行程を紹介する映像を上映されました。

三浦綾子記念文学館は、平成10年に市民の募金によって作られた民営の博物館です。文学でまちづくり、まちおこしをするというよりも、地域そのものを再発見することに主眼をおいているそうです。

同館はちょうど平成30年に開館20周年を迎え、常設展示室のリニューアルをしたばかりです。「五感展示」をコンセプトに、「見る」、「聴く」、「触れる」、「味わう」、「薫る」を来館者が体感できるようになっています。例えば、三浦綾子さんの作品を夫の光世さんが口述筆記されていたように、三浦綾子さんの声をききながら、口述筆記を体験するコーナーが設けられていたり、館外では小説の舞台を巡るフットパスツアーが開催されたりしています。

「味わう」では、三浦文学と北海道の食文化について解説されました。三浦文学にあらわれるのはジャガイモではなく馬鈴薯であるとか、ジンギスカンは葛藤の場面に、カレーライス楽しい場面に登場することが紹介されました。『続氷点』のラストシーンは網走が舞台になっていて、田中氏によるこの部分の朗読を拝聴しました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講座

世界のサケマス事情

2018.12.8 13:30-15:00

講師：市村政樹氏（標津サーモン科学館館長）

サケやマスは、北太平洋沿岸地域に暮らす人びとにとって重要な資源となってきました。本講座では、サケ・マスの生態、水産業における位置づけなどについて、最新の情報をわかりやすく紹介していただきました。

サケやマスの仲間（サケ科魚類）は世界に約66種いて、タイハイヨウサケ属（サケ属）、タイセイヨウサケ属、イワナ属、イトウ属に分類されます。日本人になじみ深いのはサケ属の魚で、シロザケやカラフトマス、サクラマスなどがこのグループに含まれます。「サケ」、「マス」と呼び分けられていますが、生物学的に区別する基準はないそうです。

サケについては、川でふ化した稚魚が海に下って成長し、4年後に生まれた川に戻って繁殖し、一生を終えるという生活史が有名です。しかし、このようなサケ科魚類は例外的で、例えば漁獲量が最も多いカラフトマスの場合、川に戻るまでの期間は2年、生まれた川に戻る魚は6割ほどということでした。

野生のサケ科魚類は、全世界で100万トンほど漁獲されています。しかし、ここ数年は養殖ものの生産量が300万トンを超え、サケ科魚類全体の70%以上を占めています。養殖ものの約2/3はタイセイヨウサケで、日本でも回転寿司の「サーモン」などとして食べられているそうです。

最後に、講師の研究活動の一環として、標津町内の川で実施しているサケの自然産卵に関する調査の一部を紹介していただきました。

講師の親しみやすい語り口に、参加者はサケ科魚類に対する理解を深めた様子でした。講座終了後には、参加者から多くの質問があり、予定終了時間を少し越えてしまうほどでした。
(学芸グループ 中田 篤)



講師の市村氏

ロビー展

ロシアのバッジコレクション

2018.12.8-12.19

会場：北方民族博物館・ロビー



バッジの展示（一部）

ロシア語通訳の針生幸子氏から北方民族博物館に寄贈されたものを中心に、ロシア・旧ソ連のバッジを紹介するロビー展を開催しました。作られた用途や、都市や人物などに分類し、約240点を展示しました。

これらのバッジのなかには缶バッジも含まれていますが、ほとんどは型どりされて作られた凹凸があり、少ない色数のシンプルなデザインのものでした。

バッジのなかで種類が多いものには、オリンピック等のスポーツ大会に関するものがあります。1980年のモスクワオリンピックのマスコットキャラクターのミーシャを象ったものもあります。柔道競技のバッジは、一見すると同じでも微妙に型が異なっているという細やかさです。

都市のバッジには、モスクワやレニングラード（現在のサンクトペテルブルグ）、近くですとサハリンのユジノ＝サハリンスクやポロナイスクなどのものがあります。それぞれ町の名所や特産品などがあしらわれています。アルマトゥイ（アルマ＝アタ）市のアルマはリンゴを意味するそうで、そのとおりにバッジにはリンゴが描かれています。サハ共和国のバッジには、馬乳酒をいれる容器チョローンや馬をつなぐ杭・セルゲのモチーフもみられます。

人物のバッジも作られています。政治家のほか、宇宙飛行士、特にユーリ＝ガガーリンのバッジは、記念周年ごとに作られているようです。またロシアでは文学者への敬意が深いことが、詩人や作家のバッジから見とれます。

バッジは集まりへの参加記念品として配布されたり、試験に合格した印として与えられるほか、お土産品として駅や空港で購入したり、知り合った人同士がお互いに交換しあうもので、友情や親交の証しにもなっていました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)

講座

知床の先史時代

2019.2.3 10:00-11:30

講師：松田功氏（斜里町立知床博物館学芸主幹）

長年斜里町・知床の文化財行政に携わってきた、斜里町立知床博物館の松田功学芸主幹をお招きし、北方民族博物館のある網走の隣町である、斜里町の先史時代についての講座を開催しました。

斜里町は、世界遺産で知られる知床半島を擁するオホーツク海に面した町です。そして、380ヶ所以上と、道内でも札幌市、北見市に続き3番目に遺跡数が多い、遺跡の町としても知られています。まず、知床半島の遺跡について紹介されました。岬の先端まで通じる道はありませんが、ここでは数多くの竪穴住居址がみつかっています。知床半島の先端部に流れる川はなく、わき水が利用されていたのだと推測されます。ここからは、国後島がよくみえ、千島列島へ向かう拠点だったのではないかとの説明でした。

斜里町のウトロ地区の入り口には、亀の形をした標高55mの大きな岩（チャシコツ崎）があります。岩の上部には、住居社が30以上もあるチャシコツ岬上遺跡があります。この遺跡からはオホーツク文化の遺物とトピニタイ文化の痕跡がみついているほか、神功開宝が発見されました。北海道独特の文化の歩みを解明する重要な手がかりになることが評価され、国指定史跡に指定されました（平成31年2月26日）。重たい機材を背負って岩を登ったり、崖際のため命綱をつけて発掘したりとの苦労がおりだったということです。

このほか、縄文時代ではじめて、平地式の住居が確認されたことや、ストーンサークルの存在ほか、斜里町の先史文化を旧石器時代からアイヌ文化期まで簡潔に紹介されました。これまでに70近い遺跡の発掘をされた講師の造詣の深さに、参加者は感じ入っていたようです。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



講師の松田氏

講座

北方民族の文様入門

2018.12.16 10:00-11:30

講師：笹倉いる美（当館学芸主幹）

展示室でよく尋ねられる質問のひとつに、文様に関するものがあります。文様は刺繍やアップリケ、木彫などによって衣服や道具に施されています。

今回の講座では、北方民族博物館の常設展示室に展示している資料に施されている文様を解説することで、観覧時により北方民族文化への理解が深まり、楽しめることをねらいとしました。

例えば北欧サミの文様の違いは、地域によることが大きいですが、またキリスト教が普及していることから、キリスト教に関連する文様をみつけることもできます。シャマンが使っていた太鼓には、サミの建物や関係する動物が描かれています。

ロシア・アムール流域のナーナイでは、花嫁衣装に「生命の樹」とよばれる文様が施されることがあります。またナーナイでは龍の文様も見られ、これは中国からの影響があるようです。

北アメリカの北西海岸インディアンの文様がオウボイドとよばれる卵形と、U字の組み合わせでできていることも紹介しました。トーテムポールなどに施され、近年ではアート作品にも使われている文様は、動物を意味していることが多く、例えばワタリガラスとワシの文様は、くちばしの形で見分けるとか、ビーバーは大きな前歯と格子状の尾で見分けるとかなどを説明しました。

このほかアイヌやアサバスカン・インディアンの文様についても紹介しました。

文様の意味を尋ねる背景には、魔除けやまじないといった、精神的な回答への期待もあるようですが、必ずしもそういった意味をもたない場合も多くあります。

講座のあとは各自常設展示室で、実物資料のなかに文様があることを確認し、新たに発見があったという感想も聞かれました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



オウボイド



北西海岸インディアンの蒸し曲げ木箱

講座

AIで色づけされた
思い出の網走オホーツク

2019.1.27 10:00-11:30

講師：宇仁義和氏（東京農業大学嘱託准教授）

昨年、一昨年に開催した写真をテーマにした講座が好評だったことから、今年度も引きつづき東京農業大学の宇仁義和氏に、写真に関する講座をお願いしました。

今回は写真やその背景を紹介することに加え、白黒写真に色付けをする最新技術の紹介と色付けにより何がわかってくるのがテーマでした。題材はオホーツク地方の写真です。

まずはじめに、カラー写真の歴史についてふれました。手作業による着色写真からはじまり、オートクローム、コダクロームというカラー写真技法が紹介されました。

そしてコンピュータを用いたデジタル作業、AIの深層学習による白黒写真の自動色付けの実際を披露しました。実験的にカラー写真を一度白黒化し、再びカラーにすることで、色彩の再現が必ずしもオリジナルに忠実ではなく、ややセピアがかかることもわかりました。

もう存在しない網走熱帯植物園や、建て替えられた北海道網走南ヶ丘高等学校、閉鎖された鱒浦海水浴場や、いまは行っていない流水突破水中水泳大会の様子など、昭和20年代以降の網走の写真は、参加者には懐かしいものが多かったようです。

白黒写真に色をつける効果として、被写体が今と関連したものと思えたり、認識をかえたりする特徴があることが指摘されました。実際に講師が撮影地を特定できなかった場所についても、会場から情報提供があり、色をつけることの効果が実感できました。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



講師の宇仁氏

ロビー展 北の渦巻き文様

会期 平成31年4月20日（土）から5月12日（日）

会場 北方民族博物館ロビー 観覧無料

北海道、サハリン、アムール川流域に暮らす先住民の道具や衣装に見られる渦巻き文様を紹介します。



白樺樹皮製箱／ウイльта

北海道立北方民族博物館研究紀要第28号目次（平成31年3月刊）

特集

人新世の北方漁業史：変わり続ける環境と社会に生きる北方民族

近藤祉秋

論文

内陸アラスカ・クスコイム川上流域におけるサケ漁撈史と現代的課題

近藤祉秋

調査報告

社会・環境適応におけるハンティの内水面漁撈の柔軟性

大石侑香

研究ノート

トゥバ人の狩猟採集活動：モンゴル国北部タイガ地域における一事例

西村幹也

中央ヤクーチア・チュラプチャ郡のウマ牧畜におけるアラースの重要性と環境変化の影響について

中田篤，ステパン・グリゴレフ

日本人によるアリュート民族の研究(1)：春日部薫著『アリュート族に関する報告』（1943年）と注釈

野口泰弥，大島稔

資料紹介

サハリン島で発見された常平通寶の成分分析

中村和之，三宅俊彦，村串まどか，小林淳哉，セルゲイ V. ゴルブノーフ

北海道立北方民族博物館所蔵コリヤーク・コレクション公開の新たな試み：SNSを利用した現地との双方向的情報交換

呉人恵，笹倉いる美

資料

のりすと 2018 —北方研究データベース—

笹倉いる美

INFORMATION

行事報告

◆12月15日（土）はくぶつかんクラブ「革とフェルトでつくる北の動物カレンダー」（講師：若山恵子解説員）を開催しました。

◆12月27日（水）札幌交響楽団員のディパスクアーレ・ヴィンチェンツォ氏、福井岳雄氏、鈴木勇人氏、猿渡輔氏をお招きし、ロビーコンサート2018「青少年のための室内楽の夕べ」を開催しました。



札幌交響楽団の皆さん

◆1月19日（土）講座「はじめての歩くスキーツアー」（講師：中田篤主任学芸員他）を開催しました。

◆1月26日（土）はくぶつかんクラブ「かんじき体験」（講師：野口泰弥学芸員他）を開催しました。



雪の感触を楽しむ参加者
（かんじき体験）

◆2月2日（土）解説会「企画展展示解説会」（講師：中田篤主任学芸員）を開催しました。

◆2月10日（土）「開館記念感謝DAY!」を開催しました。トナカイぞり体験、かんじき体験、ブリヌイ試食、北方モチーフ簡単マグネットづくりなどを行いました。また、紙しばい「玉手箱」の皆さんにより紙芝居と絵本の読み聞かせを行いました。



ブリヌイ試食、大好評でした！

◆2月16日（土）講習会「サハの刺繍」（講師：ナターリヤ・ネウストローエヴァ氏）を開催しました。

◆2月23日（土）はくぶつかんクラブ「手作りバターと簡単チーズ」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

学芸員実務実習

◆1月29日（火）～2月3日（日）の日程で、博物館実務実習を行い、3名の大学生を受け入れました。

北方民族博物館だより No.112

平成31（2019）年3月27日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会